

「あまみエフエム ディ！ウェイヴ」^{ほうそうげんこう}放送原稿（10月24日（金）放送分）

FMラジオ ディ！ウェイヴをお聞きの皆様、おはようございます。^{か ご しまけんりつあま み と}鹿児島県立奄美図書館です。

今朝は、「図書館アラカルト」と題して、「郷土コーナーの偉大な先人たち」の第2回をお送りします。

2回目となる今回は、「奄美群島日本復帰運動の父」と言われた泉^{いづみ}芳朗^{ほうろう}氏、刑務官でありながら、奄美・沖縄の文化と風俗を研究した「ケンムン博士」の^{えばら}恵原^{よしもり}義盛氏の二人を紹介します。なお、奄美文庫の『郷土の先人に学ぶ』を参考にしました。

泉^{いづみ}芳朗氏は、明治38年、1905年に徳之島の伊仙町^{いせん}上面^{かみおもなわ}縄村に生まれました。役場勤めの父と農業にいそしんだ母との間にできた9人兄弟の長男でした。学識のあった父の影響もあり、面縄小学校に通った後、新しくできた高等科に進学しました。当時、高等科は義務制ではなく、進学者はとても少なかったそうです。高等科を卒業した後、鹿児島市の^{しはん}鹿児島第二師範学校に入学。大正13年、1924年3月に卒業するとすぐに、奄美大島^{かさり}笠利^{あかぎ}の赤木名^な小学校の先生として採用されました。泉氏は、まず教育者として出発したのです。年齢は19歳でした。しかし、住民の風習・慣例を打破するような先進的な言動をしたため、1年で古仁屋小学校に転任させられてしまいます。ところがそこでも住民とうまくいかず、女性との恋愛問題を口実に1年で転任させられました。

新しく赴任したのは、母校の面縄小学校でした。厳格なところがありましたが、心やさしい面もある泉先生に生徒たちは親しみを感じていたようです。しかし、これまでのことで心の痛手もあったのでしょう、詩の世界に没入していきます。面縄小2年目の昭和2年、第一詩集『光りはぬれてゐる』を発表しました。そして、その翌年、詩への思いを断ち切れず、徳之島に別れを告げ、東京へと旅立って行くのでした。詩人泉芳朗の誕生です。

昭和3年、1928年に、第二詩集^{あかつち}『楮土に唄う』^{うた}を、昭和9年に、第三詩集^{てんとさま}『オ天道様ハ逃ゲテ行ク』を^{てんとさま}発刊しました。地方の奄美大島出身ということを堂々と誇らしく歌い上げ、社会の問題を鋭い感覚と言葉で切り込み、人道主義と平和主義を訴える泉の詩は、当時の詩壇に大きな影響を与えたのでした。しかし、昭和14年、都会生活の中で持病のぜん息が悪化し、また、日本が戦争に突き進んでいく社会状況の中、東京での詩作を断念し、転地療養のため帰郷することになりました。

奄美へ戻った泉氏は、1年間の療養ののち、昭和16年、1941年、大島教育事務局に採用願いを提出しました。最初、代用教員として辞令が出ましたが、泉氏の人間性と過去の実績が認められ、すぐさま伊仙国民学校、現在の伊仙小学校の教頭に任命されました。

そして、太平洋戦争の終期、昭和18年の10月には、徳之島の東側^{かみのみね}にある神之嶺国民学校の校長に就任します。ここでは、^{とやま}富山丸撃沈事件、徳之島空襲、国民学校焼失、太平洋戦争敗戦、小学校の再建、奄美の日本からの行政分離など、様々な体験をしました。

昭和21年4月、泉氏は、大島地区の教職員の指導と学校施設の管理を行う県の視学^{しかく}という要職^{ばつてき}に^し抜擢され、当時の名瀬市に移ります。新しい6・3・3制の学校教育の導入、小中学校の統廃合など、戦後の教育改革に尽力しましたが、米軍軍政下の圧政や住民との

摩擦により、3年後の昭和24年、辞職し再び教育界を後にしました。

しかし、時代の波は、彼を放ってはおきませんでした。奄美の米軍支配が強まる中、地元雑誌の編集者となっていた泉氏は、昭和25年8月、復帰運動の母体となった政党の書記として迎えられ、翌26年2月、「奄美大島日本復帰協議会」が発足したとき、協議会議長に選ばれました。そこから政治家泉芳朗としての命をかけた闘いが始まるのです。協議会の仲間と共に祖国復帰嘆願署名運動、島民総決起集会、断食祈願、密航陳情団の計画、日の丸事件、名瀬市長として中央への復帰陳情、吉田総理への直訴など、無血・非暴力の活動を次々と展開し、昭和28年、1953年8月、ダレス声明、12月の正式返還と、ついに奄美群島の日本復帰を勝ち取ることができました。

復帰後、泉氏は国会議員選挙に4回挑みましたが落選、もはや復帰運動の熱気は薄まり、国会議員として奄美復興を成し遂げるといふ夢はかないませんでした。その後政治活動を離れ、詩作に戻りますが、昭和34年、1959年、復帰の6年後、上京中肺炎に倒れ、54歳の生涯を閉じたのでした。あまりにも惜しまれる泉氏の死でしたが、彼の業績は今日でも語り継がれています。

5人の先人の最後は、刑務官として勤務するかたわら、奄美・琉球の風俗・生活・島唄・方言などを研究し、後に「ケンモン博士」と称された恵原 義盛氏です。

恵原氏は、明治38年、1905年、名瀬村根瀬部に生まれました。泉氏と同年ですね。小さい頃から祖父母の語る昔話や言い伝えにたいへん興味をもち、仕事の合間の昔話を夢中になって聞き入っていたそうです。このことが将来の民俗研究につながったのでしょう。

高等小学校を卒業した後、しばらく農業や大島紬の仕事をしていた恵原青年は、一念発起し、大正12年、1923年、進学のために上京しました。しかし折悪しく関東大震災に巻き込まれ、九死に一生を得ます。全財産を失った恵原氏は、東京貯金局に採用され、昼間は事務員として働き、夜は東京物理学校、今の東京理科大学で勉強しました。

昭和5年、1930年、親族の経営する金山での仕事に従事するため、台湾に渡ります。そこで、現地のアミ族の習俗に興味をもち、南洋及び琉球弧の民俗学を志すようになったのでした。昭和7年、帰郷した恵原氏は、請われて青年学校の教師になりました。これからは学問で身を立てるのだと若者たちに夢と希望を与える教育を行ったということです。

昭和9年、再び上京し、東京府中刑務所の刑務官となります。その後、沖縄、静岡、岡山、熊本、奄美、鹿児島など、各地の刑務所に勤務し、昭和41年3月、故郷の大島刑務所長を最後に退官し、30数年にわたる刑務官生活を終えたのでした。

この刑務官生活の中で、恵原氏の民俗学への志が深くなっていきます。昭和33年、当時の奄美分館長島尾 敏雄氏と「奄美郷土研究会」を組織したり、鹿児島勤務時代には、大学の先生と南島の民俗研究に取り組んだりしました。退職後、故郷の根瀬部に戻ると、果樹園経営のかたわら、奄美の民俗研究に打ち込み、現代の『南島雑話』と称される『奄美生活誌』ほか、『奄美のケンモン』など、昭和63年に亡くなるまで、多くの著作を出版しました。奄美の人々のもつ「キョラ（清ら）」の心とその心に基づく生活を記録に残したいというのが恵原氏の願いであったということです。

奄美の偉大な先人たちの生き様に改めて感動しました。奄美図書館でした。また来週。